

『失樂園』における選択と墮落 —— アダムの精神発達をめぐって ——

Choice and Fall in *Paradise Lost*:
Adam's Psychic Development

堀内直美
Naomi HORIUCHI

1. はじめに

ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-74) の『失樂園』 (*Paradise Lost*, 1667) において、アダムが墮落した理由は、イヴと運命をともにしたいという切なる願いに他ならなかった。このアダムのイヴへの愛は、クローディア・シャンペイン (Claudia Champagne) が指摘するように、彼を墮落へ導くので、ある意味で “aberrant” 「異常な」ものと考えられてきた (48)。アダムが先に罪を犯したイヴと運命をともにしたいと決心するようになるには、エデンの園での彼の人間形成が大きく影響していると思われる。このアダムの成長過程に母の不在が彼の心に及ぼした影響を、シャンペインはジャック・ラカン (Jacques Lacan, 1901-1981) の精神発達の過程を解明する鏡像段階論とファルス理論を援用して分析している。彼女は、アダムの墮落の原因として、彼の精神面における自己愛と夫としての権威の譲渡を指摘する。これまで、アダムの墮落の原因はさまざまに論じられてきた。大きく分ければ、C.S. ルイス (C. S. Lewis) はアダムが妻を溺愛した、ポール・ターナー (Paul Turner) は偶像的に崇拜した、E.M.W. ティリヤード (E. M. W. Tillyard) は情熱ゆえに知性を曇らせたと考え、アーノルド・スタイン (Arnold Stien)、スタンリー・フィッシュ (Stanley Fish)、ウィリアム・ケリガン (William Kerrigan) は、アダムのナルシスト的特徴を認め、彼の自己愛とイヴとの関係が墮落へ導いたと解釈している (シャンペイン、48-49)。本論文は、シャンペインの分析に準じて、ラカンの精神分析を援用し、アダムがこのような選択をするに至った理由を、彼の誕生とその成長に原因をたどり分析する。初めに、第8巻におけるアダムの誕生について、シャンペインも用いた鏡像段階論によって自己愛的傾向の発生を、またファルス理論によって家父長的権利の喪失を示す。次に、イヴの庭仕事の分業の提案に対するアダムの承諾は、自己愛のようにイヴを溺愛したからではなく、イ

ヴの主体性と自由意志を重んじたからであると指摘する。しかし、シャンペインがアダムの選択を、自己を否定することが目的ではなく、自己を守ることが目的である自己保存と解釈するのに反して、イヴと運命をともにするアダムの選択は、神の命令に背いて禁断の果実を食べることが死の可能性をはらむ行為である点において、真にイヴを思いやり、イヴへの愛情ゆえの自己犠牲的行為であると結論する。

2. アダムの誕生と成長

神は天使ラファエルを遣わし、アダムにこの世界がどのようにして、またなぜ造られたかを語らせる。それにより、アダムは天における戦いとサタンの追放、御子の天への帰還、そして天地創造の完成を知る。第8巻でアダムは徐々にラファエルとうちとけ、自分が造られた時以来、記憶に残る思いを切々と語る。

As new waked from soundest sleep
Soft on the flowery herb I found me laid
In balmy sweat, which with his beams the sun
Soon dried, and on the reeking moisture fed.
Straight toward heaven my wondering eyes I turned,
And gazed a while the ample sky, till raised
By quick instinctive motion up I sprung,
As thitherward endeavouring, and upright
Stood on my feet; about me round I saw
Hill, dale, and shady woods, and sunny plains,
And, liquid lapse of murmuring streams;
.....
Myself I then pursued, and limb by limb
Surveyed, and sometimes went, and sometimes ran
With supple joints, as lively vigour led:
But who I was, or where, or from what cause,
Knew not; to speak I tried, and forthwith spake,
My tongue obeyed and readily could name
Whate'er I saw. (VIII.253-73) ¹

そうです、あれは

熟睡から目覚めたとてもいった感じでした。気がつくと、私は
花が咲き乱れている草の上に静かに寝そべっていました。
快い汗をかいていましたが、太陽の光が立ちのぼる湯気を
吸い取ってくれ、すぐに乾きました。驚いてはっと眼を天に向け、
暫くの間広々とした青空を見つめていました。やがて本能的に
急に体を動かし、天に昇ろうとでもするかのように飛び起き、
真っ直ぐに地上に両足で立ちました。周囲を見渡しますと、
そこには山や谷や鬱蒼たる森や明るい野原や、せせらぎの音を
たてて流れている小川がありました。

.....
私はそこで自分の身体を調べ、手足を次々に眺め、沸々と湧き
起こる生気に促されるまま、しなやかな関節を動かし、時として
歩き、時として駈けてみました。しかし、自分が果たして
何者なのか、自分が何処にいるのか、いかなる理由でここに
こうしてしているのか、分かりませんでした。何かものを言おうと
しました。すると忽ち喋ることができ、舌が自由自在に動き、
眼についたものに片端から名前をつけることができました。

まず、アダムは「熟睡から目覚めたとてもいった感じで」気がつく。彼は「驚いてはっと眼を天にむけ」、「やがて本能的に急に体を動かし」、「飛び起き、真っ直ぐに地上に両足で立ちました」、そして「私はそこで自分の身体を調べ、手足を次々に眺め」、「しなやかな関節を動かし、時として歩き、時として駈けてみました」、「すると忽ち喋ることができ、舌が自由自在に動き、眼についたものに片端から名前をつけることができました」と語る。この一連の行動を発達心理学の観点から見ると、アダムは、赤ん坊が誕生した後すぐ手足をバタバタと動かすように、本能的に体を動かし、めざましい成長を遂げたことになる。

もちろんアダムの創造の描写は、「創世記」第1章27節「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」（新共同訳）という記述にもとづいている。しかしアダム自身、「自分が果たして何者なのか、自分が何処にいるのか、いかなる理由でここにこうしてしているのか分かりませんでした」と語る。そして自分のアイデンティティが分からないことが、彼にとって重大な問題なのである。ミルトンのアダムは他者を知らないで、彼は人間のイメージを思い描けない。アダムの成長はとても早く、母にあやされて育つことなく、突然成人したようなものである。彼は“strayed”「彷徨い」（VIII.283）や“wandering”「放浪」（VIII.312）といった言葉が示す、自分探しの状態の時

に、母の存在を欠いたまま、成長してしまったと言えるだろう。

このような人間の成長過程の大切な時期が心に及ぼす影響と母の存在を欠いた時の影響を、シャンペインはラカンの鏡像段階論を援用して分析している。ラカンの鏡像段階論は極めて重要な理論である。福原泰平は「鏡像段階とは、『私』というものの構造化、自己が初めてみずからを私と言いうるものとなっていく段階のことをいう。つまり鏡像段階とは、まだ口もきけず、無力でその運動をコントロールしていく能力もない本源的な欲動のアンカーに突き動かされているだけの幼児が、鏡を前にそこに映る成熟した自己の全体像を、小躍りして自分のものとして引き受ける段階のことである」(56)と説明する、つまり、幼児は2歳ごろまで神経系の発達が未熟で、感覚——運動系も不調和で、幼児の体は不完全でバラバラなものの寄せ集めにすぎない。その幼児が自己の先取りとして、鏡の中に全体像を一挙に見いだすというのである(57)。

シャンペインは、母親の養育による幼児の自己認識をラカンの鏡像段階に当たるとし、「新生児にとって大切なことは、他の人々の中に見る自分自身のイメージである。特に母親の目は、新生児に答えることによって、そしてその心に、アイデンティティの感覚を起こすことにより鏡の役割をする。それにより新生児に自分が実際に存在することを再保証する」(49)と説明する。かくして、アダムは手や足を見ることはできても、全体として自分の姿を見ることなく、イヴに出会うことになる。もちろん夢の中で創造主に会っているが、すぐひれ伏し、その姿ははっきり見ていないと思われる。「創世記」第1章26節は、「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう』」と記している。しかしアダムは自分自身の姿を知らない。自分が創造主の似姿であることは、アダムには分からないのである。

鏡像段階における母親をとおしての自己認識を欠いたまま、アダムは肉体的には健全に育っている。手足をバタバタ動かし、歩いたり、走ったりした後、さらに彼は、言葉を獲得し、自由に話すことができたのである。これは新生児が「ダー」とか「ノン」とかの片言をしゃべるようになることに相当する。ラカンはこの段階を‘le symbolique’「象徴界」と呼んでいるが、そこでは言語がプラス、マイナスの記号として機能し、「在と不在の運動の中で、自己ということが初めて意味を持つようになるのである」(新宮、190)。アダムの場合、発達がかなり早いので、彼は被造物に名前をつけることができるほどである。

ラカンの「象徴界」に照らして、アダムの様子がどのように描かれているかを見てみよう。アダムは“Not of myself; by some great maker then”「自分自身でこの世に生まれたのではないと思う。…或る偉大な創造主が、わたしを造られたはずだ」(VIII. 278)と確信し、“Tell me, how may I know him, how adore”「その方をどうしたら知り、拜むことができるのか、私に言ってくれ！」(VIII. 280)と叫んだ。アダムは“strayed I knew not whither”「あてもなく彷徨い歩き出し」(VIII. 283)、木蔭で物思いにふけり再び眠りに陥

る。そして彼はその眠りの中で、“shape divine”「神々しい姿の方」(VIII. 295) から突然自分が“First man”「最初の人間」(VIII. 297) であることを告げられる。そしてエデンの園にある住処へ案内される。その“Presence divine”「聖なる者としてのその御姿」(VIII. 314) は、“Whom thou soughtst I am”「まさに私こそお前の求めている者なのだ」(VIII. 316) と語り、エデンの園を託するにあたり、その権利と義務を論じ、一つの禁制を守るように命令する。アダムがそれを破れば“mortal”「死ぬべき存在」(VIII. 331) となり、楽園から追放されることになる。

アダムは自分のアイデンティティを知るために、大声で創造主を呼び求めた。ラカンは‘invocation’「呼び求め」を「欲望と要求が満足させられるために必要な呼び招きの段階」(『無意識の形成物』上、224) であるとしているが、アダムは父と思われる方を呼び求めた。父の機能は精神分析の歴史の中では重要な位置を占めている。ラカンは父の機能が「エディプスの問題の中心にあり、… 無意識が最初に明らかにしたのは、まず、そして何よりも、エディプス・コンプレックスです。無意識の解明において重要なのは、幼児期の健忘です。何についての健忘でしょうか。それは、母親に対する幼児の様々な欲望という事実であり、その欲望が抑圧されているという事実についての健忘です」(236) と述べている。エディプス・コンプレックスとは男子が母親に性愛感情をいだき、父親に嫉妬する無意識の葛藤感情のことをいうが、アダムの場合も母親に対する無意識の性愛感情が抑圧されていると言えるのではないだろうか。

アダムは生まれてすぐ、立ち上がり、歩きだし、そして自分が誰であるかの答えを、夢の中で創造主から直接聞くこととなった。神はアダムに、「最初の人間」であると告げられた。シャンペインは、神がアダムにアイデンティティを与えたため、アダムは神に対して著しい劣等性を認識すると考えている (50)。ラカンの分析においては、‘le nom du père’ <父の名>とは象徴的なものであり、彼は<父の名>とは「<他者>の中で、法に効力を与える者として<他者>を代表象しているのです」(225) と述べ、「主体は<父の名>というシニフィアン(記号表現)の欠如を補填しなければならない」(215) と主張する。キャサリン・ベルシー (Catherine Belsey) は『ポスト構造主義』において、ラカンの特に大文字の‘l’Autre’ <他者>を「象徴界」とし、私たちの外部にあり、わたしたちが主体となるための条件であると解説する (179)、さらに、「シニフィアンとは意味を帯びた音声、イメージ、書かれた形象、物体、慣行、あるいはしぐさなど」(179) を意味していると解説する。アダムの場合は、まさに象徴そのものである創造主を父として補填しなければならない。そうすることによってアダムは、人間としての自己のアイデンティティを獲得するのである。かくして、シャンペインが解釈するように、アダムは直接、律法、権威への服従、そして言葉の領域に置かれることとなった (50)。

3. アダムの自己愛依存

創造主から、被造物すべてを“as lords”「主となって」(VIII.339) 支配するように与えられたアダムではあったが、彼の心は満たされなかった。彼は強い不満と孤独を感じ、大胆にもそれを創造主に訴えた。

But man by number is to manifest
His single imperfection, and beget
Like of his like, his image multiplied,
In unity defective, which requires
Collateral love, and dearest amity. (VIII.422-26)

しかし、人間が自分を一という数で表すとき、それは孤独で不完全であることを示しており、その一という欠陥を補うためには、自分に似た者によって同じく似た者を生み、自分の像を殖やしていかなければなりません。そうするためには、自分に寄り添ってくれる者の愛情と深い睦み合いがいります。

アダムのこの強い訴えに対してすべてを見通す創造主は、次に必ずや彼が満足する“fit help”「適った助者^{たすけ}」(VIII. 450) を連れてくることを約束される。女が創造されたこの歴史的瞬間を、ミルトンは次のように描写する。

Who stooping opened my left side, and took
From thence a rib, with cordial spirits warm,
And life-blood steaming fresh; wide was the wound,
But suddenly with flesh filled up and healed:
The rib he formed and fashioned with his hands;
Under his forming hands a creature grew,
Manlike, but different sex, so lovely fair,
That what seemed fair in all the world, seemed now
Mean, or in her summed up, in her contained
And in her looks, which from that time infused
Sweetness into my heart, unfelt before,

And into all things from her air inspired

The spirit of love and amorous delight. (VIII.465-77)

その方は身を

屈めて私の左の胸部を開き、心臓の温かい生气と迸り出る
鮮やかな血潮とともに、一本の肋骨を取り出されました。傷口は
大きく開いていましたが、盛り上がった肉ですぐに塞がり、綺麗に
癒りました。その方は肋骨を両手で持ち、何かをそれで
造ろうとされていました。そしてやがて一つの生き者が、その
巧みな創造の手の下で出来上がっていきました。その者は人間の
ようでしたが、性が異なっており、うっとりするほど美しく、これに
比べるとそれまで美しいと思っていた世界中のすべてのものも、
遥かに見劣りがしました。いや、彼女の中に、彼女の顔の中に、
すべての美しさが集まり包まれているように思われました。
彼女の顔は、私の胸に未だかつて感じたこともないような快さを
この時以来注ぎこみ、また彼女の息吹はすべてのものに愛情と
恋慕の情とを吹き込みました。

まず、上記引用箇所前半の6行を見てみよう。読者はここであまりの生々しさに圧倒されるのではないだろうか。今にも心臓の鼓動が聞こえてくるような、あるいは血の滴りが見えるような鮮明な映像に、まるで外科手術を見るかのような畏怖と驚きを感じる。引き裂かれた傷口からはポタポタと血が落ち、ドクドクという音と共に脈打つ心臓の映像が迫り、ボキッともぎ取られた肋骨には、べったりと血がついているかもしれない。ここでは目に見える映像に音がついているのである。視覚的イメージに聴覚的イメージが付随している。この二つの感覚のイメージの結合によって、刺激は重層化し、読者に与える感情も複雑化する。人から取られた肋骨は血が滴り、ピクピク動いているかのような錯覚さえ覚える。確かに肋骨が生きているように感じられさえる。一方、「創世記」第2章22-21節は「主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた」と記す。「創世記」においては、「骨」や「肉」は「心臓の温かい生气」にも「迸り出る鮮やかな血潮」にも塗れてはいない。非常に無機質で生气が感じられない記述である。

次に、この女をミルトンはどのように描いているか、後半の7行を見てみよう。ここには恋愛のエッセンスがつまっている。彼女はとても美しい。そして彼女はアダムの思いの中で拡大し、空想化され、美化される。例えば、どんな欠点が彼女にあっても、それはアダム

の目に入らない。彼女はアダムの思いの中では絶対的なもの、完璧なものとなってしまっている。“in her…”(VIII. 473)を繰り返し、さらにたたみかけるように“in her looks”(VIII. 474)と「彼女の中に」という言葉を三回も重ね、彼女がいかに全世界の美の集合体であるか、つまり美そのものであるかを強調している。他のものがつまらないものに見えるということは、事実上彼女の美德が最上級であることをほのめかしている。この感覚は恋の始まりである。しかし次の瞬間、彼女の姿は突然消え、アダムは暗闇の中に取り残される。彼は創造主との対話で疲れ、眠り、夢の中で彼女に出会った。アダムの心の中で最大限に膨らんだ思いは、突然消えることによって、火に油を注ぐように二倍三倍に増大したのではないだろうか。かのプラトンも『饗宴』第10章で、「逃げる——追う」という愛の逃走のテーマに言及している。ミルトンはこの奥義どおりに恋人をその恋愛者の前から消している。アダムが眠っている間に、“Of fancy my internal sight”「内なる眼である想像」(VIII.461)、つまり想像力の働きによって見た女が彼の覚醒とともに消えた。いや消えたために目覚めたのである。会いたいののに会えない、見たいのに見ることができないという状況は、ますます思いが募って恋愛をさらに熱いものにする効果を高める。

最愛の恋人が去ったり、失われたりしたとき、恋愛者は苦悩する。アダムもまたしかり、彼女を失ったことによってすべての喜びを失ったように感じた。彼は失望のどん底に突き落とされたのである。成就する恋も片思いに終わる恋もあるが、恋愛には苦しみの要素が含まれる。アダムの心には清らかで純粋な感情が生まれ、また痛みも残る。アダムは女に引きつけられ、その虜になる。アダムの思いの中で女は拡大、美化され、彼の空想物として魅惑的に造りあげられる。女は突然去ったり失われたりさえする。それゆえ、女は清く美しい存在となる。アダムにとって幸いだったのは、この夢の中の女が次の瞬間に現実となって目の前に現れたことである。彼女が現実の姿となってアダムの前にやって来たとき、彼の思いの中だけで膨らんでいた恋愛の対象であった女は、イヴという実体を持ち、彼の恋愛は成就する。アダムは獣たちが“Approaching two and two”「一番ずつ近づいてくる」(VIII. 350)のを見て、自分も同等な者との“fellowship”「交わり」(VIII.389)を本能的に求めていた。アダムが眠っている間にアダムの肋骨から造られたイヴは、母親を知らないアダムにとって半身であり、まさに鏡像段階における母の姿そのものである。性は異なるけれど、アダムは初めて視覚的に人間のイメージを結べたのである。

ところがラカンの鏡像段階論によれば、「この像は統一体という幻想で主体を一つの束にまとめて、自我と呼ばれる自己愛的ナルシスの鎧の萌芽を生みだし、『私』というものの構造化を促進してくれる」(福原、59)。そのため、シャンペインが「フロイトはアダムの主張を‘object-libido’『他者愛欲』あるいは愛ではなく、初歩的ナルシズムの証拠である‘ego-libido’『自己愛欲』と呼ぶ」(51)と考えるように、アダムは自分自身を愛するようにイヴを愛するようになる。アダムの自己愛的な愛が自分自身でもあるイヴへ向けられた。

体が成熟したアダムは、本能的に心身両面にわたる全人的な「交わり」を求めている。この夢の中の女性は「うっとりするほど美しく」、「彼女の息吹はすべてのものに愛情と恋慕の情を吹き込みました」と描かれている。このようにして、アダムは情熱を掻き立てられ、夢の中の女性であるイヴの美の虜となる。アダムは肋骨を与え、血を注ぎ込み、イヴは愛情を吹き込むことにより両者の心が通う。

夢の中の女性は、アダムの「内なる眼である想像」によって思い描かれた女性である。シャンペインは「彼女は現実の女性ではなく、彼の 'fantasy' 『心象』である。そしてこの 'misrecognition' 『誤認』はイヴがその結婚で感じる根本的な不満の原因である」(52-53) と考える。アダムはその女性を次のように語る。

I now see

Bone of my bone, flesh of my flesh, myself
 Before me; woman is her name, of man
 Extracted; for this cause he shall forgo
 Father and mother, and to his wife adhere;
 And they shall be one flesh, one heart one soul. (VIII. 494-99)

今、私の眼の前には、

まさにわが骨の骨、わが肉の肉、いいえ、私自身なのです！
 男から取り出された者という意味で、この者を女と名づけましょう。
 このゆえに男は父母を離れ、その妻にあい、二人は一つの体、
 一つの心、一つの魂、となることになりましょう。

これは誕生したイヴへのアダムの言葉であるが、アダムはイヴを一人の個体として認識してはいない。彼はまさに自分の半身として自分自身を愛するように語っている。これは自己愛を表していると解釈できる。シャンペインは、アダムがイヴと視覚的に出会うことで、アダムが欠如している鏡像段階を補い、その欠如を越えると考え。しかし彼女は「人は自分自身を二つに分けることによって完全であることをもくろむことはできない」(53-54) というラカンの言葉を引いて、アダムは自分を欺いていると解釈する。ラカンは「鏡像段階とは、主体が、まさに現実でありながら同時にそうではないもの、つまり虚像と出会うことです。この虚像は、私が主体の『原像 Urbild』と呼ぶ、主体のある結晶化において決定な役割を果たします」(『無意識の形成物』上、329) と述べている。確かに、アダムはイヴとの生活で、イヴを愛することはできても、イヴを正しく認識していないように思われる。アダムはイヴを自分の半身として鏡に映った自分のように自己愛的に愛している。アダムにとっ

てイヴは鏡の中の自己、虚なる自己である。その誤認がアダムの躓きであり、ひいては彼を墮落へ導くことになる。

4. アダムの家父長権の喪失

鏡像イヴは、アダムの虚像であるだけではない。ラカンによれば、幼児が言語（幼児語）を習得するようになると、自己中心的な空想の中で母と自己同一化を喜んでいた幼児が、母のいる・いない（在・不在）を言語表現できるようになるにつれ、ある種の象徴化を起こす。福原はこの現象を、「幼児は幼児語ではあれ記号の中に住まう者となり、母の不在というというそこに欠けたものでさえ、なんら恐れることなく一つの言語のうちに捕捉することができるようになる」（101-02）からであると説明する。つまり、幼児語を得ることで幼児は、母の不在に耐えられるようになるが、これは同時に記号の中に自らを消滅させることでもある。この手続きをラカンは去勢と呼ぶが、主体のこの消滅について、彼は「身体像は、存在すると同時に存在しないような何かとして獲得されるのであり、主体はこれとのかかわりで、自分自身の運動を、さらにまた、自分と一緒に鏡の前に立っている人々の像を位置標定します。… 自我の鏡像的『原像 Urbild』から出発している軌跡のおかげで、子供が自らを征服し、自らを同一化し、前進していくことができるようになる」（『無意識の形成物』上、330-31）と主張する。

アダムは時間軸では、イヴを得る前にすでに言語を習得しており、外部にある彼が主体となる条件とすでに同一化している。それにより、彼は自分が「最初の人間」であるというアイデンティティを獲得した。アダムはラカンの言う「象徴界」にすでに達しているが、これは母不在で彼が誕生したことによる。幼児の発達過程では、言語習得は鏡像段階の次にくるものである。鏡の中の鏡像をとおして自我を先取りして歓喜していた幼児は、次に言葉を発することで母の不在に耐えられるようになり、母と、母の鏡像かつ、自分の虚像である満ち足りた自己を失うことになる。ラカンはこれを「さまざまなシニフィアンからなる連鎖のなかで、何が欠けることがあります。皆さんには、ある特異なシニフィアンが欠如していることの重要性を理解していただかなければなりません。このシニフィアンとは、私がお話しただけの〈父の名〉であり、これは、法、すなわちシニフィアンのある一定の秩序における分節化——つまりエディプス・コンプレックスあるいはエディプスの法、母親についての禁止の法——があるという事実を基礎づけるシニフィアンです」（215）と定義する。

これはまさにシャンペインの言説「ラカンの理論である子供の鏡像段階においては、他者あるいは母に一致するアイデンティティは、エディプスの欲望で満たされている。それはフロイトが主張した文字通りの去勢の脅威ではなく、子供が成長とともに父の存在を認識する

ことによって造られた、子供の全能か母への男根的支配の象徴的脅威に直面するとき抑圧される」(50) ことに一致する。「母への男根的支配の象徴的脅威」とはまさに父のことである。子供にとって「なるほど、ファルスは母の欲望を満たすために子供が同一化しなければならない想像の対象である限りでは、まだそれ本来の場所に置かれることはできないかもしれません。…これらのささやかな積み重ねのうち三番目のものが、禁止するために介入してくる父です。まさにそのために、父は母の欲望の対象をまさしく象徴的な列へと移動させ、その結果、この対象は単なる想像の対象ではなくなるばかりではなく、さらに、破壊され、禁止されます」(330-32) とラカンは述べる。さらに、このファルスについての関係を「主体がファルスを様々な形で引き受けるという場合もあるでしょうし、また主体がそれを彼のフェティッシュとしているという場合や、母に対する倒錯的な関係の原始的な根と呼びうるようなものが問題となっている場合もあるでしょう」(『無意識の形成物』上、332-33) と主張する。シャンペインは、主体が持つべきファルスを、アダムがイヴを造るために与えた肋骨に譬えている。さらに、「イヴを『生む』ためにアダムはその肋骨を失う。そしてそれゆえ象徴的に彼の男根を失う」(52) と解釈する。

このファルス理論によって、アダムはどのような変化をこうむっていったのかを見てみよう。ミルトンはプラトンが言うように、夢の中で出会った女を突然消すという劇的狀況を作って恋愛の効果を高めた。そしてここでもまた、イヴが突然逃げ出す状況を作り、アダムとその伴侶たるべきイヴの心理的高揚を高めている。アダムは、“though pure of sinful thought, / Wrought in her so, that seeing me, she turned” 「まだ少しも罪の思いに穢されていない自然の情そのものが、その心のうちに動いたらしく、彼女は私の姿を見るや否や、急に背を向けて逃げようとしてました」(VIII.506-7) と語る。求愛者は逃げられれば追いたい気持ちになる。そこで “I followed her” 「私はあとを追いました」(VIII.508) と告白するように、アダムはイヴを追いかけ、“To the nuptial bower” 「夫婦の契りを結ぶにふさわしい四阿へと」(VIII.510) 導くことに成功する。もちろんここには “with obsequious majesty approved” 「私の切なる願いを厳粛にしかも素直に聞き入れてくれました」(VIII.509) とアダムに言わしめるイヴの同意があった。

but here

Far otherwise, transported I behold,
 Transported touch; here passion first I felt,
 Commotion strange, in all enjoyments else
 Superior and unmoved, here only weak
 Against the charm of beauty's powerful glance.
 Or nature failed in me, and left some part

Not proof enough such object to sustain,
 Or from my side subducting, took perhaps
 More than enough; (VIII.528-537)

見ただけで

心が躍り、ちょっと触れただけで心が躍るのです。こんどこそ、私は初めて情熱というものを、なんともいえぬ異様な激情を、覚えました、——他の楽しみの場合には超然として心を乱されることはなかったのに、この場合だけは、美しさが投げかける一瞥の強い魅力の前には、脆くも負けそうになったのです。いや、それとも、『自然』が私を造る際に失態を演じ、或る部分をこのような対象に対して抵抗できないように造りあげていたのかもしれませんが。或は、私の胸部から肋骨を取り去る時に、必要以上のものを取り去っていたのかもしれませんが。

アダムは創造主への訴えの中で、“Collateral love, and dearest amity”「自分に寄り添ってくれる者の愛情と深い睦み合い」(VIII.426)の必然性を結婚愛の理想としていた。そこで彼は、体と心と魂が一つとなる者との“harmony”「調和」(VIII.384)と“true delight”「真の交歓」(VIII.384)を求めていた。つまり、彼は肉体的なものと精神的なものの両方を求めていた。では、婚姻の床にイヴを招き入れることのできたアダムの現実はどうか。彼は我を忘れたのである。“transported” (VIII.529)、“transported” (VIII.530)という同じ言葉が二度繰り返されることによって、彼がいかに理性を失っているかが分かる。彼は見ても見えず、触れていても覚えていないかもしれない。アダムは自分の想像を絶する世界へ落ち込んでいった。アダムはその情熱と興奮の訳が分からず自問自答する。第8巻でアダムがラファエルに尋ねていた天使の愛、“obstacle find none / Of membrane, joint, or limb, exclusive bars”「それを邪魔する、粘膜とか関節、手足、といった障害物は何一つない」(VIII.624-25) 交わり方とは違い、これは “As flesh to mix with flesh, or soul with soul”「人間の肉体と肉体が、もしくは魂と魂が交わるときのような限られた交わり方」(VIII.629) そのものである。そしてついに、「美しさが投げかける一瞥の強い魅力」に打たれたのだと告白する。そして彼は、自分が欲望に「脆くも負けそう」なほど弱く造り上げられたのではないかと感ずる。アダムはエデンの園の統治権を委ねられ、“sanctity of reason”「聖なる理性」(VII.508)と“Magnanimous”「高邁な心」(VII.511)を授けられているのに、以下のように、イヴの魅力の虜になった自分の弱さを否定できないのである。

yet when I approach

Her loveliness, so absolute she seems
 And in herself complete, so well to know
 Her own, that what she wills to do or say,
 Seems wisest, virtuousest, discreetest, best; (VIII.546-50)

それにもかかわらず、彼女の美しさに接するとき、彼女が完全無欠で本来自ら完成された者、しかもその自分の特質を充分知っている者、といった風に見えます。従って、そのなそうとすること、言おうとすること、そのいずれもがこの上もなく賢く、正しく、分別に富み、最善そのもののように見えてなりません。

一方、アダム の目に写ったイヴを見てみよう。彼にとって彼女は完全で完璧なのである。というのも、“absolute” (VIII.547) と “complete” (VIII.548) という絶対性を持つ形容詞を二つも重ねてイヴに捧げているからである。さらに “wisest, virtuousest, discreetest, best” (VIII.550) という連続した形容詞の最上級の羅列が強い印象を与える。アダムは、自分が理想としている結婚愛の始めにはやくも自制することのできない愛に溺れたと言えよう。ここではアダム の武器である、いかなる “knowledge” 「知識」 (VIII.551) も “wisdom” 「知恵」 (VIII.552) も機能していない。アダム が最も頼りにしなければならない理性はアダム にみられない。彼は “Authority and reason on her wait” 「彼女には権威と理性が傅いています」 (VIII.554) と語り、あたかもイヴが彼の権威をすべてもっているかのように感じている。肋骨を抜き取られたことで、象徴的に男根を失い、彼は肉体的に去勢されたと言ってもよい。しかし、去勢は肉体のみならず精神的にも起こっていたのである。アダム はあたかも男としての地位と権威を精神的にイヴに譲ってしまったかのようなのである。イヴは、その誕生と同時に、アダム にとっての鏡像段階で母としての鏡像を提供し、アダム が言語を獲得した時点で、母としての鏡像の役割を消される。実際にはアダム はイヴに会う前にすでに言語を習得しているので、アダム の心の発達は順序どおりには起こらない。そのためこの時、アダム は自己の主体性を喪失させられたかのようになる、つまりアダム は精神的に去勢されたかのようになるのである。シャンペインは、象徴的に「アダム の男根がイヴとなる」(52) とさえ言う。「ラカンにいわせれば、去勢の体験を軸に、子供は想像的な鏡像の支配する世界から、象徴的な欠けた代理表象の世界へとシフトする」(福原、106) ことに合致する。

アダム が普通の幼児の発達をしていないことが、アダム にとって特異な状態を生む。アダ

ムは鏡像段階とファルス理論を同時に体験しているように見えるのである。鏡像段階の錯覚でイヴを理想化し、自己の半身としてイヴを自己愛的に愛するようになる。しかし彼はすでに言語を習得していたので、神から教えられた自分のアイデンティティである「最初の人間」として、エデンの園を支配する義務と権利、つまり家父長権を得ていた。しかし彼はそれをイヴに与え、精神的に去勢されたような状態となった。そしてアダムはイヴを完全なもの、完成されたものと感ずるようになる。あたかも男としての地位をイヴに譲ったかのように、彼は自分の家父長権のみならず自信をも失ったかのように見える。アダムは自己愛的な欲望により、半身としての空想のイヴを消さずにいだきつつ、さらに失った自分の男としての地位、権威を持っている者のようにイヴを崇めさえる。鏡像段階とファルス理論を同時に体験し、このような激情に陥り、家父長権を喪失したかのように思われることがアダムの特異性と考えられる。

5. アダムの選択と墮落

アダムとイヴの結婚生活は順調で、繁茂する自然に対処するために、ある日、イヴは“Let us divide our labours”「私たちは労働を分けたらどうでしょうか？」(IX.214)と言って、庭仕事の分業をアダムに提案する。しかしここには、家庭の平和を維持するにあたり、夫婦が基本的に直面する愛情と自由意志の問題が提起されている。アダムはイヴが一人になることを許し、はたしてイヴは誘惑される。問題は、なぜアダムがイヴの提案を受け入れ、一人で行かせたかである。まず、アダムがイヴをどのように認識していたかを見てみよう。

Or this, or worse, leave not the faithful side
That gave thee being, still shades thee and protects.
The wife, where danger or dishonor lurks,
Safest and seemliest by her husband stays,
Who guards her, or with her the worst endures. (IX.265-69)

お前は自分に生命を与え自分を常に忠実に庇い守って
いてくれる者の脇から離れてはならないのだ。危険や何か不名誉な
ことが近くに潜んでいる時、妻は、自分を守り最悪な場合共に
耐えてくれる夫の傍を離れないのが、安全で賢明な道なのだ。

アダムの主張は、一見、家庭の頭として当然の言い分と思われる。しかしこれに対して、

イヴは自分の思いがアダムに正しく伝わらなかったので、語気を荒げて、“But that thou shouldst my firmness therefore doubt / To God or thee, because we have a foe / May tempt it, I expected not to hear” 「しかし、神やあなたに対するわたしの誠意を、—— 敵が近くにおいて誘惑するかもしれないからといって、あなたに疑われていようとは、思いもよらぬことでした」(IX.279-81) と、明らかに怒りの口調で反論する。これに対して、アダムはあくまでも “his care / And matrimonial love” 「妻への愛情と心遣い」(IX.318-19) から、“Why shouldst not thou like sense within thee feel / When I am present, and thy trail choose / With me, best witness of thy virtue tried” 「わたしが傍にいる時、同じ感じをお前が持たないのはなぜなのか？なぜわたしと一緒に試練に会おうとしないのか、わたしこそ試練に会うお前の美徳の最善の証人なのに」(IX.315-17) と、頭として優しく説得を繰り返す。

このアダムとイヴの優しい説得は何に由来するのであろうか。ミルトンが『創世記』に依拠しながら、『失樂園』のアダムとイヴの関係をどのように描いているかを理解しておく必要がある。人類の創造に関して、『創世記』には男女の対等を示唆するエロヒストと男女の序列を示唆するヤーウィストの二説が記述されている。この二説は本来矛盾しているもので、フェミニズム文学批評の台頭にともない、『創世記』の読み直しが始まり、それを受けて、『失樂園』を新しく解釈する動きが起こった。佐野弘子はその経緯を、「フェミニスト神学者フィリス・トゥリブルは、…『人』は人類を意味する総称的な言葉であり、本質的に両性具有であって、『女』の創造があって初めて『男』が具体化する、つまり性別が生じる、と考えたのである。このようなトゥリブルの努力に刺激されて、メアリ・ナイキストは、…ミルトンが、両性の対等を認めるエロヒストの記述に、女性の創造によって初めて性別が生じることを示すヤーウィストの記述を適合させ、『創世記』の二つの異なる創造の物語を統合して、男女間の対等と差異との矛盾を解こうとしたのだと論じた」(12-13) と概説する。

では『失樂園』はどのようにアダムとイヴを描いているのか、第4巻を見てみよう。

though both

Not equal, as their sex not equal seemed;
 For contemplation he had valour formed,
 For softness she and sweet attractive grace,
 He for God only, she for God in him:
 His fair large front and eye sublime declared
 Absolute rule; and hyacinthine locks
 Round from his parted forelock manly hung
 Clustering; but not beneath his shoulders broad:

She as a veil down to the slender waist
 Her unadorned golden tresses wore
 Dishevelled, but in wanton ringlets waved
 As the vine curls her tendrils, which implied
 Subjection, but required with gentle sway,
 And by her yielded, by him best received,
 Yielded with coy submission, modest pride,
 And sweet reluctant amorous delay. (IV.295-311)

ところで、その性が一見して
 等しくないのと同じく、二人は等しい存在ではなかった。
 彼は瞑想と勇気に向くように、彼女は柔和と魅惑的な優美に
 向くように、また、彼はただ神を仰ぐように、彼女は彼の内なる
 神を仰ぐようにと、造られていた。彼の美しい広い額と
 仰いで天を見る眼は、絶対的な支配権を示していた。
 そのヒアシンス色の捲毛は、左右に分けた前髪のあたりから
 いかにも男らしく房々と垂れ下がっていたが、かといって、
 広く頑丈な肩の下までも垂れるほどではなかった。彼女の
 飾りもつけず梳くこともしない金髪は、嫺やかな腰のあたりまで
 ヴェイルのように垂れ下がり、葡萄の蔓のような豊かな
 捲毛となってゆるやかに波うっていた、この長い髪は、
 服従を意味していた。しかし、それは優しい力で求められて
 初めて与えられる、従う風情の中にも差みの色や内気な誇りを見せ、
 愛情に溢れながらも艶めかしげに嫌がり、相手を焦らす、——
 それだけに彼の方も一層の喜びをもって受け入れる、といった
 服従なのだ。

ここで強調されているのは、男女のヒエラルキーと対等とのバランスである。長い間西欧社会の土台となっていた家父長的権威は、聖パウロの教えにもとづいている。彼は「コリントの信徒への手紙一」第11章3節で「すべての男の頭はキリスト、女の頭は男、そしてキリストの頭は神であるということです」と述べている。ミルトンは、この聖書の根拠による男女の序列を和らげる工夫をしている。アダムの優しい説得はここに由来すると考えられる。二人は相互理解により家庭生活を維持してきた。アダムの「優しい力」とイヴの自発的「服従」が調和を保ってきた。しかし第9巻の庭仕事の分業をめぐる場面で、あくまでも二人

で危険に対処しようというアダムに向かって、イヴは自分の意見を主張し始める。

And what is faith, love, virtue unassayed
 Alone, without exterior help sustained?
 Let us not then suspect our happy state
 Left so imperfect by the maker wise,
 As not secure to single or combined.
 Frail is our happiness, if this be so,
 And Eden were no Eden thus exposed. (IX. 335-41)

外から助けられないで単独では試みにも
 会えない、そんな信義や愛情や美德はいったい何なのでしょう？
 一人の場合でも二人の場合でも、自分で自分が守りきれない
 ような不完全なものに、私たちの幸福を賢い造り主が作られたとは、
 考えたくはありません。もしそうなら、なんとという儂い幸福でしょう。
 そんな危ない所ならエデンはエデンではないではありませんか？

イヴは強く単独行動を主張する。これは相当アダムに衝撃を与えた。アダムの理想であり、夢であり、ナルシスト的願望の対象であったイヴの鏡像にひびが入った。アダムは自分の半身であるイヴが自分に従順であると信じていたからである。アダムは今までの優しい調子を変えて、重々しく言い放つ。

O woman, best are all things as the will
 Of God ordained them, his creating hand
 Nothing imperfect or deficient left
 Of all that he created,

 Go ; for thy stay, not free, absents thee more;
 Go in thy native innocence, rely
 On what thou hast of virtue, summon all,
 For God towards thee has done his part, do thine. (IX. 343-75)

おお、女よ、すべては神がその御意志に従って定められた
 ままでよいのだ、それで最善なのだ。神はその創造の御手を

のぼして万物を造られたが、何一つとして、不完全なものや
欠陥のあるものを造られはしなかった。……………

…………… 一人行くがよい。

自由な意志からでなければ、留まるのも遠くに去るのと同じだ。

生来の無垢のまま、自分の美徳に頼って行くがよい。全力を尽くせ。

神はお前に対しその務めを果たされた。こんどはお前の番だ。

「おお、女よ」は聖書的表現である。エリザベス・リーバート (Elisabeth Liebert) が「彼 [アダム] は序列の違いを誇張する頓呼法を選び、そうすることによって非難を伝える」(59) と解釈するように、聖パウロの教えによる序列の違いを示すようなアダムの言葉に威圧が窺える。アダムはイヴに対して聖書の権威を裏づけとして家父長的権威を行使した。しかし、これにはアダムの複雑な心境が隠されているように思われる。つまり、アダムの優しさと弱さである。まだ自己の鏡像であるイヴに執着し、また自分の権威と地位を精神的に譲ったイヴに強く出られ、彼は反射的に失ったかに見える家父長的権威を行使したと言えないだろうか。しかしアダムの家父長的権威は、フェルス理論によれば、イヴに精神的に譲渡され、彼がイヴに夢をいだいているため、建前としてのみ機能しているように見える。また「おお、女よ」を「創世記」第1章27節が暗示する対等を示す言葉として解釈するなら、アダムは「一人の場合でも二人の場合でも自分で自分が守りきれないような不完全なものに、私たちの幸福を賢い造り主が作られたとは、考えたくはありません」というイヴの主張を否定できず、「神はその創造の御手をのぼして万物を造られたが、何一つとして、不完全なものや欠陥のあるものを造られはしなかった」という言葉に同意を示すことにより、イヴに対する理解を示しているとも考えられる。しかしアダムはもともと自分を不完全なものとして認識し、神にそれを補う伴侶を求めていたのである。このアダムの選択に関しては、夫としての権威の放棄ゆえに、妻に従順を命ずることができなかった家庭的責任の失敗など、多くの議論がなされている。その中でもダイアン・マッコレー (Diane McColley) は、このエピソードを「アダムとイヴの二人がうまく活かせる、従順の新しい機会である」(26) と考え、一人で行くイヴの決意を評価する。マッコレーは、妻に従順を命じられなかったアダムの失敗を指摘し、妻への溺愛のもとであるイヴへの情熱か自己愛依存症ゆえに、アダムが自ら墮落を招いたと解釈する。またリーバートは、「アダムとイヴは善悪の選択を学んでいる。彼らは神に不従順になることなくそれを学んでいる」(41) と考える。私は、アダムがここで頭としての役割を充分果たせなかったのは、イヴを溺愛するあまり彼女の言いなりになったというより、アダムが自己愛依存症でありながらもイヴの主体性と自由意志を尊重したからであると考えられる。

イヴの主体性と自由意志を尊重して一人で行かせた結果、招いたイヴの墮落を知ってアダ

ムが運命をともしにする決心をする場面には、自己愛的傾向が窺われる。アダムはそれを心の中で以下のように呟いた。

How can I live without thee, how forgo
 Thy sweet converse and love so dearly joined,
 To live again in these wild woods forlorn?
 Should God create another Eve, and I
 Another rib afford, yet loss of thee
 Would never from my heart; (IX. 908-13)

お前なしでどうやってわたしは生きてゆけよう？ お前とは固く結ばれている、そのお前との楽しい語らいと愛の生活を棄てて、この寂しい荒涼たる森の中にどうして独りで生きながらえることができよう？ たとえ神がもう一人別なイーヴを造られ、わたしがそのためにもう一本の肋骨を提供するとしても、お前を失った痛手は絶対にわたしの心から消え去るまい、そうだ、絶対に消えまい！

心の動揺を抑えて、アダムは “I with thee fixed my lot, / Certain to undergo like doom, if death / Consort with thee, death is to me as life” 「わたしはお前 [イヴ] と運命を共にし、同じ審判を受ける覚悟だ。死がお前の道ずれなら、その死はわたしにとって生命と同じものだ」 (IX, 952-54) と語る。アダムの言葉に対し、イヴは “Oh glorious trial of exceeding love, / Illustrious evidence, example high!” 「おお、アダムよ、あなたは今大きな愛の輝かしい試練を経て、目も眩むような愛の証と気高い手本を示されました！」 (IX, 961-62) と言う。イヴがアダムの言葉をアダムの愛と解釈するように、アダムの言葉はアダムの優しさであり、自己放棄を窺わせる。アダムは依然として、虚像であり夢の中のイヴである自己の半身を愛することから完全に抜けきっていない。しかし、シャンペインが考えるように自分だけを愛して、やがては死に至るナルシスの自己中心的な愛に共通する、暗く消極的な思いではないように思われる。シャンペインは、「アダムの決心は自己の否定ではなく、自己の保存を目的としている」 (56) と解釈するが、死に関わる決心は自己を離れなければならないことであろう。アダムは精神的に去勢され、完全に自己愛から抜け出せていなくとも、イヴとの結婚生活で、愛情を注がれ、人を愛することを多少は学んだはずである。このアダムの思いは、自己愛に等しい他者への愛ではないだろうか。シャンペインは「アダムは肉体的にイヴを生み、イヴは精神的にアダムを生んだ」 (53) と考えている。アダムは権力を象徴するような肋骨と血を与えることによって創造されたイヴを得たが、イヴは愛情を象徴する

ような息吹を吹き込み、尊敬のまなざしでアダムを見、従順な手を与えている。イヴの墮落後にイヴと運命を共にするというアダムの決心は、自己愛的自己保存の思いではなく、二人の間に生まれていた愛情にもとづく自己犠牲的行為ではないだろうか。

愛ゆえにイヴと運命をともにするアダムの選択は、人間の欲動にもとづいている。アダムは 'object-libido' 「他者愛欲」あるいは愛に突き動かされてイヴとともに死のうとしている。愛ゆえに死の欲望に囚われている人物として、ラカンはアンティゴネを取り上げ、その欲動を分析している。彼は『アンティゴネ』への注釈で、「アンティゴネの行為、アンティゴネという人物ほどディオニソス的なものはありません。しかし彼女は純粹欲望と呼べるものをリミットまで成就します。純然たる死の欲望そのものです。この欲望を彼女はその身に具現しているのです」（『精神分析の倫理』下、176）と述べている。この点についてベルシーは、「愛は、欲望そのものと分離可能な昇華の一形態としての快感と緊密に結びついている。しかしラカンはまた悲劇の説明の中で快感と死をひとつにまとめる。…ラカンは彼女 [アンティゴネ] を英雄的であるとみなす」（『文化と現象界——新たな文化理論のために——』、89）と解説する。アンティゴネが、テーベの王クレオンがアンティゴネの兄ポリュネイケスの死体を埋葬してはならないと禁じたクレオンの法に背いて兄を埋葬し、罰として生きながら埋められ、死に直面すべく駆り立てられていくように、アダムも神の禁制に背いてイヴの差しだす果実を食べ、罰として死に直面すべく駆り立てられていった。ラカンは、アンティゴネが母の近親相姦の婚姻の子であるがゆえに、自らの存在を犠牲にしなければならないこと、これが夫や子供であったら、また代りも見つけられるが、同じ母胎から生まれ、同じ父をもつという共通性をもつゆえに宿命的限界へと進むことを強調している（『精神分析の倫理』下、171、177）。本来夫婦には血のつながりはないが、アダムと彼の肋骨から創造されたイヴとは、あたかも一つの子宮から生まれた兄弟のような血のつながりがあるとも言える。アダムは鏡像としてイヴを誤認しているが、イヴへの激情がアダムをイヴとともに死ぬ決意へ駆り立てたと思われる。ベルシーは、「フロイトは、一方にリビドー、他方に死への欲動があることをますます確信するようになった。…ラカンは、フロイトの広く流布した見解にいたる道をたどりながら、フロイトが後生大事に保ち続けてきた、死とリビドーという二項対立を退ける。ラカンにとって欲動は性的かつ致死的であり、生を与えるとともに破壊的なものである」（225-26）と解説する。ラカンは「欲望の機能とは死との基本的関係の内にとどまり続けるものなのです」（『精神分析の倫理』下、207）と述べている。フロイトの言うリビドーとは、性本能を発現させる力で快感追求的な性質をもつが、ラカンは性的快楽と死の快楽を結びつけたのである。ラカンの性と死を結びつけた欲動の説明こそが、イヴへの愛情ゆえにともに死ぬことを選んだアダムの行為を「異常」とされるものにしていく理由の裏づけとなるとと思われる。イヴの主体性と自由意思を尊重してイヴの提案を許可したアダムの選択が、予想もしなかった彼女の墮落を招き、アダムはイヴと運命をともにする決心

をしなければならなかった。

5. おわりに

以上、アダムの精神発達をラカンの精神分析の理論を援用して考察してきた。鏡像段階論により、アダムの誕生における母の養育の欠如を指摘し、それがアダムの自己愛依存症を引き起こし、イヴに対する誤認を招いたこと、またイヴへの過剰な欲望へ発展したことを見てきた。さらにファルス理論により、アダムの家父長的権威が精神的に喪失したこと、そしてそれがイヴへ精神的に譲渡されたように見えることを考察した。また、アダムは二人の間で育まれた愛情によってイヴの主体性と自由意志を尊重し、彼女の庭仕事の分業の提案へ承諾を与えたと考えた。自由意志の尊重はアダムのイヴへの愛情の表現であったが、アダムの承諾が思わぬ結果であるイヴの墮落を招くことになった。アダムが死を覚悟してイヴと運命をともにする決心をした理由は、性的快楽と死の快楽の結合不可分性にもとづく愛情に根差した自己犠牲的行動であると結論する。

注

1. 原詩の引用は Alastair Fowler, ed., *Paradise Lost* (London: Longman, 2007) により、日本語訳は平井正穂訳『失樂園』(岩波書店、1981年)による。

引用文献

Champagne, Claudia M. "Adam and His 'Other Self' in *Paradise Lost*: A Lacanian Study in Psychic Development." *Milton Quarterly* 25 (1991): 48-59.

Liebert, Elisabeth. "Domestic Adam." *Milton Studies* 53 (2012): 41-67.

McColley, Diane. "Eve's Dream." *Milton Studies* 12 (1978): 25-45.

Milton, John. *Paradise Lost*. Ed. Alastair Fowler. London: Longman, 2007.

キャサリン・ベルシー著、折島正司訳『ポスト構造主義』岩波書店、2004年。

キャサリン・ベルシー著、高桑陽子訳『文化と現象界——新たな文化理論のために——』青土社、2006年。

佐野弘子「ミルトンの女性観・結婚観をめぐる批評」、「ミルトンの愛の詩——伝統と創造——」、辻裕

子、佐野弘子共編『神、男、そして女——ミルトンの「失樂園」を読む』英宝社、1997年、3-8頁、59-92頁。

新宮一成『ラカンの精神分析』講談社現代新書、講談社、2002年。

ジョン・ミルトン作、平井正穂訳『失樂園』(上)(下)、岩波書店、1981年。

プラトン作、鈴木照雄訳『世界の名著、プラトンⅠ』中央公論社、1976年。

福原泰平『ラカン 鏡像段階』講談社、2005年。

ジャック・ラカン著、ジャック＝アラン・ミレール編、佐々木孝次、原和之、川崎惣一訳『無意識の形成物』(上)、岩波書店、2005年。

ジャック・ラカン著、ジャック＝アラン・ミレール編、小出浩之、鈴木國文、保科正章、菅原誠一訳『精神分析の倫理』(下)、岩波書店、2006年。

参考文献

Blessington, Francis C. *Paradise Lost: A Student's Companion to the Poem*. Lincoln: An Authors Guild Backinprint, 2004.

Belsey, Catherine. *Shakespeare: The Loss of Eden*. Houndmills: Macmillan, 1999.

---. *Desire: Love Stories in Western Culture*. New York: Blackwell, 1994.

Borch-Jacobesen, Mikkel. *Lacan : The Absolute Master*. Trans. Bick Douglas, Stanford: Stanford UP, 1991.

Danielson, Dennis, ed. *The Cambridge Companion to Milton*. Cambridge : Cambridge UP, 2012.

Dobranski, Stephen B. *The Cambridge Introduction to Milton*. Cambridge: Cambridge UP, 2012.

Lewalski Barbara K. *The Life of John Milton*. New York: Blackwell 2003.

Herman, Peter C. and Elizabeth Sauer, eds. *The New Milton Criticism*. Cambridge: Cambridge UP, 2012.

Myers William. *Milton and Free Will: An Essay in Criticism and Philosophy*. New York: Croom Helm, 1987.

Poole, William. *Milton and the Idea of the Fall*. Cambridge: Cambridge UP, 2005.

Ragland-Sullivan, Ellie. *Jacques Lacan and the Philosophy of Psychoanalysis*. Urbana and Chicago: U of Illinois P, 1986.

Schwartz, Regina M. *Remembering and Repeating: Biblical Creation in Paradise Lost*. Cambridge: Cambridge UP, 2011.

Stocker, Margarita. *An Introduction to the Variety of Criticism: Paradise Lost*. Houndmills: Macmillan, 1988.

Sugimura, Noel K. "The Question of 'what Cause?' : Storytelling Angels and Versions of Causation in *Paradise Lost*." *Milton Studies* 54 (2013): 3-27.

Zwicker, Steven N. *The Cambridge Companion to English Literature 1650-1740*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.

ポール＝アラン・アスン著、西尾彰泰訳『ラカン 文庫クセジュ』白水社、2000年。

小野功生『ミルトンと十七世紀イギリスの言説圏』彩流社、2009年。

ジェーン・ギャロップ著、富山太佳夫、椎名美智、三好みゆき訳『ラカンを読む』岩波書店、1990年。

難波江和英、内田樹『現代思想のパフォーマンス』光文社新書 177、光文社、2005年。

ジャック・ラカン著、ジャック＝アラン・ミレール編、小出浩之、新宮一成、重鈴木國文、小川豊昭訳『精神分析の四基本概念』岩波書店、2000年。

ジャック・ラカン著、ジャック＝アラン・ミレール編、佐々木孝次、原和之、川崎惣一訳『無意識の形成物』(下)、岩波書店、2005年。

ジャック・ラカン著、ジャック＝アラン・ミレール編、小出浩之、鈴木國文、菅原誠一訳『対象関係』(上)(下)、岩波書店、2006年。

ジャック・ラカン著、ジャック＝アラン・ミレール編、小出浩之、鈴木國文、保科正章、菅原誠一訳『精神分析の倫理』(上)、岩波書店、2006年。